

日本語とインドネシア語の会話における【評価】の後のあいづちの
現れ方-説明の会話をデータに-

Okie Dita Apriyanto

(オキ ディタ アプリヤント)

大阪大学大学院 言語文化研究科 日本語日本文化専攻

oki_carter@yahoo.com

要旨

本研究はあるあいづちがどのような会話構造の中で現れるのかを明らかにし、その上で、どのような機能を果たすのか、その後の会話はどのように展開していくのかを明らかにすることを目的としている。そのため、分析に用いる概念として、話題と連鎖組織を入れることとする。まずデータとして、「説明する会話」を使用した。あいづちが現れる直前の発話の発話機能ごとのあいづちを分類し、その前後の発話の連鎖組織の分析を行った。本稿は特に【評価】の後のあいづちに注目し、そのあいづちがどのような会話の流れで現れるのかを見てきた。これにより、同じ【評価】に対して現れる「うん」でも、機能が異なることが分かり、さらに【評価】の後に現れる日本語の「そう」とインドネシア語の「heeh」の機能が同じ傾向にあるということが分かった。しかし、分析を行った際に、本研究のデータ中の【評価】の使用場面が全て同じではないことに気付いた。ある話題について会話参加者に知識の差が存在すれば、発話される【評価】も違ってくるのではないかと考えられる。

キーワード：あいづち、対照研究、連鎖組織、談話分析、評価

A. はじめに

あいづちは日本語会話において重要な役割を果たしていると言われており、日本語会話指導の中で欠かせないポイントの一つである。あいづちの指導ポイントを探るべく、アプリヤント（2016）は、あいづちが発話された直前の発話を基準にし、あいづちの機能を分

析した。しかし、分析結果ではあいづちの使用について適切に指導するものとして十分とは言えない。筒井（2012）は、あいづちの運用を指導しようとするならば、どのような時にどのあいづちを用いればいいのかということを、あいづちを打つ対象となる発話との関連において示さなければならないと述

べた。つまり、あるあいづちがどのような機能を持っているかだけでなく、そのあいづちがどのような会話の流れの中で現れるのか、直前にはどのような発話がされているか、さらにその後の会話はどのように展開していくのかを論ずる必要があると考えられる。したがって、本研究では、あるあいづちがどのような会話構造の中で現れるのかを分析し、その上で、どのような機能を果たすのか、その後の会話はどのように展開していくのかを明らかにすることを目的とする。

B. 先行研究

日本語あいづち研究の中には、他の言語との対照研究もいくつか見られるが、インドネシア語との対照研究は未だになされていない。本節では日本語と外国語のあいづちの対照研究について見ていく。

1. あいづちの先行研究

日中のあいづちの対照研究に関しては、楊（1999）があげられ

る。中国語母語話者同士と日本語母語話者同士の会話を分析し、中国語の会話より日本語の会話の方があいづちの頻度の個人差が小さいと述べている。つまり、日本語母語話者同士の会話では会話参加者は平均的にあいづちを頻繁に打つものに対して、中国語母語話者同士の会話では会話参加者の中に多くあいづちを打つ人もいれば、あいづちを打たない人もいるということである。また、中国語の会話では日本語の会話のようにあいづちを打つ適切なタイミングの機会が少ないことが分かった。つまり、日本語の会話の多くは、終助詞の位置とポーズの間、すなわち話し手が話している途中と話した後にあいづちを打つものに対して、中国語の会話では話し手が発話した後に聞き手があいづちを打つ場合が多いのである。

日韓のあいづちの対照研究に関しては、金（1994）があげられる。日本語と韓国語、両言語の電話による医療相談の会話の分析を行っている。頻度の面では日韓の

差はあまり見られないが、日本語母語話者のあいづちが聞き手の発話に重なるように打たれることが多いのに対し、韓国語のあいづちは、相手がポーズを取るとほぼ同時に打たれると述べている。

日英のあいづちの対照研究に関しては、メイナード（1993）があげられる。日英のあいづちの対照研究に早くから取り組んでいるメイナード（1993）は、日米の友達同士の会話の録音及び録画を資料にし、分析を行っている。メイナードはあいづちの形態を「短い表現」、「頭の動きのみ」、「笑い」の3つに分けている。日本語の会話では2.47秒に1回のあいづちが打たれる一方で、英語の会話では11.75秒に1回のあいづちが打たれるという、大きな差が見られたと述べている。また、日本語の会話と英語の会話に見られる頭の動きに関しては、両言語ともあいづちの機能としてよく使われているが、英語の会話では頭の動きのみで相手の話に反応する確率が

日本語より高いという。そして、「短い表現」というあいづちの形態から見れば、日本語の頻度は英語の3倍近くであり、圧倒的に多いこととなる。

これらの対照研究を通して、日本語のあいづちは韓国語を除き、英語や中国語と比較して多く打たれるということが分かった。

2. 先行研究の問題点

複数の言語間でのあいづちの使用を比較するには、頻度とタイミングの観点から分析する必要があると考える。なぜなら、会話の中に現れるあいづちの頻度を明らかにすることで、その言語の日常会話におけるあいづちの在り方を示すことができると考えられるからである。さらに、あいづちのタイミングを分析することで、各言語でのあいづちのタイミングの特徴が明らかとなり、あいづちがコミュニケーションを円滑にする役目を果たすことから外国語としての会話教育を行う上で重要なポイントとして扱うことができると思うからである。これまでのあい

づちの対照研究はその二つの観点に注目してきたが、アプリアント (2016) では、あいづちの指導に役立てることを目的とし、各言語において、どのような発話に対してどのようなあいづちが使われるかを明らかにするために、形式と機能という観点も加え、頻度・タイミング・形式・機能という4つの観点で日本語とインドネシア語のあいづちの対照研究を行なった。しかし、アプリアント (2016) の分析で基準にしたのはあいづちが発話された直前の発話であり、日本語とインドネシア語のあいづちの各形式の機能の分析のみに留まっている。つまり、これまでのあいづちの対照研究と同じくあいづちだけを見ているだけであり、会話の中に現れるあいづちとしては分析できていない。

C. 分析方法

1. 本研究で扱う会話データ

本研究では「説明の会話」をデータとして、分析を行う。「説明の会話」は、話し手が新しい情

報を提供するため、情報交換が行われ、聞き手にとってあいづちが打ちやすくなる会話であり、また受け取った新しい情報に対する意見や感情を表出するあいづちも生じやすいと考えられるため、あいづちを研究するのに適していると考える。そこで、調査協力者には「自分が知っている旅行先・故郷・母国のこと」について話してもらうことにし、以下の2つのデータを収集した。

データⅠ：インドネシア語母語話者同士による「自分の故郷」についてのインドネシア語での会話

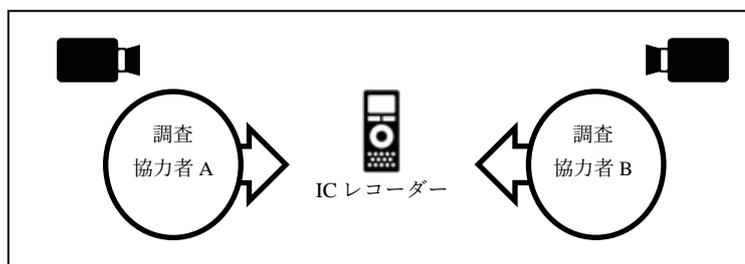
データⅡ：日本語母語話者同士による「留学・旅行に行った国」についての日本語での会話

本研究で扱うデータは調査協力者20組から収集した。日本語とインドネシア語でそれぞれ10組からデータを収集し、そのうち、女性同士のデータを5組、男性同士のデータを5組とした。なお、日本語の影響が会話データに及ぶこ

とのないよう、インドネシア語母語話者同士の調査協力者は日本語学習者ではないインドネシア語母語話者とした。日本語母語話者同士による会話は関西地区の大学の外国語学部の学生に協力してもらい、出身地は設定しないが、違う専攻言語の学生同士で組んでもらった。

会話を収集する際には、1組につき20分間録音および録画を行った。ただし、録音・録画されている状態での会話は参加者に緊張を与えると考えられるため、分析対象として扱ったデータは、開始後5分間を除いた15分間の会話を文字化したものとした。

図1 データ収集の様子



2. 分析方法

アプリヤント (2016) ではあいつちの機能の定義¹を立て、各あいつちの直前の発話を見てあいつちがどのような機能を持っているかを分析している。しかしそこで得られた考察は、会話教育指導へ

¹ あいつちとは、話し手が発話権を使用している間に、または話し手の発話が終了した直後に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える機能を持ち、聞き手が自由意志に基づいて送る短い表現である。

の応用には不十分であるため、分析方法を見直す必要がある。

本研究では、分析に用いる概念として、話題と連鎖組織を採用することとする。本研究はあるあいつちがどのような会話構造の中で現れるのかを明らかにし、その上で、どのような機能を果たすのか、その後の会話はどのように展開していくのかを見ることを目的

とし、以下の分析手順で分析を行う。

a. 話題の移行による分析単位の設定

アプリヤント (2016) は、日本語のあいづちの頻度がインドネシア語より高い理由について言及している。日本語会話では、聞き手が、完結した情報だけでなく、情報が途中で終わっている短い発話にもあいづちを打つ一方で、インドネシア語会話の場合、聞き手は話し手の発話が終わるまであいづちを打たない。しかし、アプリヤント (2016) では、何をもって発話のまとまりと考えるかについては触れておらず、あいづちがどのような時に発話されているのかは明らかになっていない。

そのため、本研究では、文字化した会話データを話題ごとに区切って分析を行うこととする。話題ごとに区切ることで、これまで見てきた発話のまとまりが、ある一つの話題であるか否かが確認でき、さらに、あいづちが話題の切替えの際に現れる時、会話に何ら

かの影響を及ぼし得るのかを明らかにすることができるかと考えるからである。なお、分析単位の設定方法は筒井 (2012: 39) の 5 つの基準を参考にする²。

b. 分析単位ごとの各発話の発話機能ラベル付け

発話機能は、ザトラウスキー (1993) と筒井 (2012) を参考にし、分析に必要なものは筆者が補い修正したものを使用する。

c. あいづちが現れる直前の発話の発話機能ごとのあいづちの分類

アプリヤント (2016) では、まずあいづちの機能の定義を立て、あいづちが現れる前の発話を基準にしてあいづちの機能を決定した。しかし本研究では、あいづちの形式が同じでも、機能に差異がある

² 1) それまで話題となっていた対象や自体とは異なる、新しい対象や自体への言及；2) すでに言及された対象や自体の異なる側面への言及；3) すでに言及された対象や自体の異なる時間における様相への言及；4) すでに言及された対象や自体について、それと同種の対象や自体への言及；4) すでに言及された個別の対象の一般化。

かどうかを探るため、同じ形式のあいづちを直前の発話の発話機能ごとに分類し、ある発話機能の後に現れる同じ形式のあいづちの機能の一つ一つ見ていくこととする。

d. あいづちが現れる前後の発話の連鎖組織の分析

あいづちを分類した後に、これらのあいづちがどのような会話の流れで現れるかを見るためには、あいづちが現れた前後の発話、つまり連鎖組織を見る必要がある。これにより、あいづちが現れた後にターン³が変わるのか、それとも、話題自体が切り替わるのかを明らかにすることができると考えられる。さらに、あいづちがどのような会話の流れで、どのような傾向を持っているのかを分析したい。

³ ターンの定義はメイナード (1993) を参考にし、ターンとは、会話において一人の話者が話す権利を行使するその会話中の単位で、会話の当事者によりそのなんらかの意味または機能を持っていると認められたものとする。しかも、ある発話が誰かのターンと認めるためには、話し手と聞き手両者とも発話の順番を撮るものが何かを言うことと認め、それを補う形で聞き手は聞き手の役目を引き受けなければならない。このような状況が確認される時、話し手がターンを取ったとする。

以上、1) から 4) までの手順により分析を行うことで、連鎖組織に見られる言語形式を抽出できるのではないかと考える。

D. 分析結果

本研究のデータとして用いた「説明の会話」には、【語り】及び【意見提示】が多く出現し、これらの発話の直後に聞き手が【評価】⁴を行う傾向が見られた。本研究では【語り】及び【意見提示】の直後に現れるあいづちも見ていくが、本稿では、【評価】の後にあいづちが現れるか、また、どのように現れ、その後会話がどのように展開していくのかを見ていく。

1. 【評価】の後にあいづちが現れるもの

日本語とインドネシア語の会話の中では、【評価】が発話された後にあいづちが現れるとは限ら

⁴ ここで言う【評価】は筒井 (2012:79) を参考に、提供された情報に対して、単にその内容を理解したことを示すのではなく、その情報に対する関心や驚き、意外な気持ちなど、その情報の理解以上の評価的な判断を表す発話であるとする。

ない。そのため、3章では大きく二つに分け、【評価】の後にあいづちが現れるものと現れないものについて論じる。

a. 日本語の会話の中の【評価】の後の「うん」と「そう」について

日本語の会話の中で、【評価】の後によく現れるあいづちとして「うん」と「そう」が挙げられる。まずはこの二つのあいづちが【評価】の後に現れる際、それぞれどのような機能を持っているのか、どのような連鎖組織の中に現れるのかを見ていく。

1) 「うん」の考察

日本語の会話の中で【評価】の後によく現れるのは「うん」という形式のあいづちである。しかし、同じ「うん」でも、機能が同じであるとは限らない。本稿のデータでは、【評価】の後の「うん」に2つの種類が見られた。それは、話し手が自分の発話に対する聞き手の意見を承認する<うん①>と、承認するもののそれが完全ではな

い<うん②>である。まず、<うん①>について見ていく。

<うん①>は話し手が述べた意見や語りについて、聞き手が理解または同意しているかどうかの承認を表す機能を持っている。<うん①>が現れる連鎖は以下のよう

01A: 【意見提示】
02B: 【評価】
03A: 【うん1】

または

01A: 【語り】
02B: 【評価】
03A: 【うん1】

この連鎖組織に示されるように、「うん」は、BがAの【意見提示】または【語り】に対する【評価】を発話した時に現れている。もし、Bの02での【評価】がAにとって妥当なものでなければ、あるいはAが発話した【意見提示】【語り】を理解しているとBが示されなければ、03ではAが訂正を入れるはずである。しかし、Aは03で「うん」と発話しているため、<うん①>はBの【評価】の正しさを承認する機能を持っている

と考えられる。以下の会話例(1)で、N2が「タイの夏には雨が降る」ということに関する経験を30~34行目で語っており、N1が37行目で「大変」と【評価】すると、それに対してN2が「うん」により【同意】を示し、N1の【評価】を承認している。

(1) データ II (タイの夏の経験について)		
30 N2:なんか夏は,雨が降る,		【語り】
31 N1:うんうん		【部分的理解】
32 N2:から,つとねうちが行ってたとき最後の日ぐらい洪水が起きて		【語り】
33 N1:=ああ,そっか		【内要理解】
34 N2:私の家洪水で水につかりましたと言われ,h[hh		【語り】
35 N1: [hhh えっ生徒に?]		【情報要求】
36 N2:=学生さんが[言ってたとか		【情報提供】
37 N1: [へえ:そうか, 大変 .		【感情】 【評価】
38 N2: うん		【同意】

39 N1:私::初めて行った1年生のときで,その前の年にあの,		【語り】
40 すごい大きな,=		
41 N2:=あうん		【部分的理解】
42 N1:洪水が,[あって,		【語り】

さらに、<うん①>の後は話題が変わる傾向があると考えられる。会話例(1)における30~38行目の下位話題は「N2の学生の洪水経験」だが、39以降は「N1の洪水経験」となっており、38の<うん①>が話題の転換のきっかけとなっている。

次の会話例(2)も見ていく。N1が405行目で述べた【意見提示】に対してN2が「あれは難しい」と【評価】を述べ、それに対してN1が「うん」とN2の発言を承認している。したがって、ここでの「うん」も<うん①>だと考えられる。

(2) データ II (外国語の文字について)		
405 N1:ああそっか,でも私あれ,文字がアラビアの文字のままや		【意見提示】
406 ったらトルコ語やってない		
407 N2: あああ, あれは難しい =		【内容理解】 【評価】
408 N1: うん		【承認】

409 N2:ペルシア語とかも,なんか[そんな感じ? [やんね		【確認要求】
410 N1: [ちょっと [うん		【確認】
411 N1:難しい本当こうこうこう[こう		【意見提示】
412 N2: [書けたらかっこいい=		【評価】
413 N1: うん ,けど		【承認】
414 N2: 勉強する気ない hhh		【評価】
415 N1: そう ,どこで切れるかがまず分かん[なくて,	←	【承認】 【意見提示】
416 N2: [うんうん		【同意】

また、会話例(1)と同様、話題の転換も見られる。405~408 行目は「トルコ語がアラビア文字ならば」についての話題だが、409 行目以降は「ペルシア語はアラビア文字」という話題で会話が進んでいる。

さらに、会話例(2)では、<うん①>のあいづちだけでなく、<うん②>も現れた。ここで言う<うん②>は 413 行目に見られる「うん」のことである。この「うん」の直後の 04 では A が B に対して【意見提示】を行なっていることから、03 の「うん」で B の意見を完全に承認しているわけではないことが分かる。<うん②>が現れる連鎖組織は以下のように表す。

- 01A: 【語り】
- 02B: 【評価】
- 03A: 【うん②】
- 04A: (でも・けど) 【意見提示】

つまり、B が発話した【評価】が A にとって妥当なものでなければ、または A の【意見提示】や【語り】を理解しているというこ

とを B が示さなければ、03 では直接 A の訂正が現れるはずである。しかし、「うん」が見られるということにより、<うん②>の機能は、B が発話した【評価】を【承認】するということだと言える。ただし、直後にその訂正を行おうとしている。

会話例(2)では、411 の N1 の【意見提示】に対し、N2 が 412 で【評価】を行っている。N1 はその【評価】を 413 の「うん」で【承認】しつつ、「けど」で訂正を行おうとしている。414 は N2 の先取りで訂正の発話はなされていないが、415 の「そう」で、「私もそれを言いたかった」という【承認】(次節参照)をしていることから N2 の 414 の【評価】が訂正の内容に当たるものであったことが分かる。なお、この<うん②>の連鎖組織の場合は「うん」の後に話題が変わるということはないようである。

2) 「そう」の考察

串田 (2002) は、引き取り⁵の場面で現れる「うん」と「そう」について、「そう」とは、直前の相手の発話が、自分の発話計画に対して独自の貢献をしたことを認定するために利用可能な道具であると述べている。つまり、「そう」は、話し手自身がこれから発話しようとする内容を、聞き手が代弁してくれたということを【承認】するために使われる。本稿で扱うデータには、「そう」が発話された後に、「そう」の発話者がそのままターンを取り、発話された意見について違う語り、または違う意見を述べるという傾向が見られた。このように「そう」の現れる連鎖組織は以下のようなものである。

- 01A: 【語り】
- 02B: 【評価】
- 03A: 【そう】 【語り】

「そう」と<うん①>と<うん②>の違いは、<うん①>と<

うん②>は話し手が言った意見や語りについて、聞き手がきちんと理解または同意しているかどうかの承認であるが、「そうは」、Bが発話した【評価】が、Aの自分の発話計画にあり、Bが代弁してくれたということを【承認】するために使われる。

会話例(3)では、142-146 で N1 がトルコの祭りについて【語り】を行い、それに対し、151~153 で N2 が【評価】を行っている。N2 の【評価】の後に、N1 が「そう」と発話することにより、N2 が発話したことが発話計画にあり、代弁してくれたということを【承認】している。その後の会話の話題が変わらず、N1 がさらなる【語り】を行っているということが「そう」の【承認】の機能の証拠であると言えるだろう。

⁵ 串田 (2002) での「引き取り」は本研究で言う「先取り」のことで、話し手の話を聞き手が完結することを指す。

(3) データ II (トルコの祭りについて)		
142 N1:=そう,有名なのが,断食祭りとその後,砂糖,砂糖祭り		【語り】
143 N2:砂糖? hhh		【確認要求】
144 N1:うん,なんか,断食開けに,[甘いもの,あめあめか,あめ,[あめちゃん		【確認】 【語り】
145 N2: [へえ:: [へえ::		【感情】
146 N1:あめちゃん,がどこにでも置いてある,ていうのと,後犠牲祭?		【語り】
147 N2:ほお		【感情】
148 N1:とか,かな:h[hh		
149 N2: [へえ		【感情】
150 N1:私も勉強し(h)て(h)る[hhhなんと[か		【語り】
151 N2: [hhh [へえ <u>でも日本に全然ないよう</u>		【感情】 【評価】
152 な=		
153 N1:=うんうんうん=		【承認】
153 N2:= <u>お祭りが</u> =		【評価】
154 N1:= <u>そう</u> ,なんか:そのちょうどぎせいさいの時期に,私のクラスか		【承認】 【語り】 ←
155 ら,3人トルコに,[留学し始めて,		
156 N2: [留学? へえ::		【補充】 【感情】

b. インドネシア語の会話の中の「heeh」で、機能は日本語に見られる「そう」と近似している。インドネシア語の「heeh」は以下の連鎖組織に現れる傾向がある。

【評価】の後の「heeh」について

インドネシア語の会話で、

【評価】の後にあいづちが現れる

データも見られる。その形式は

01A: 【語り】

02B: 【評価】

03A: 【heeh】 【語り】

(4) データ I (村の行事について)		
104 I2:eh kalo dulu, maksudnya di daerah gitu, bukan di=		
105 I2:=daerah sih,ada acara rt rw gitu gak sih?		
106 I1:ya ada ada [rt, apalagi kalo yang tujuhbelasan sih=		【情報要求】
107 I2: [ada? ngapain aja?		【情報提供】 【語り】
108 I1:=paling, [tapi makin=		【確認要求】
109 I2: [oo::h		【語り】
110 I1:=kesini tu makin:[::n		【内容理解】
111 I2: [kaya gak ada=		【語り】
112 I1:=makin berkurang,[karena anak-anak kecilnya itu dah=		【先取り】
113 I2: [hu:m		【語り】
114 I1:=makin gak ada.=		【内容理解】
115 I2:= <u>individualis gi tu ya</u>		【語り】
116 I1: [heeh, kalo kalo yang dulu tuh=		【評価】
117 =waktu masih sd, masih smp tuh masih kalo mau=		【承認】 【語り】
118 I1:=tujuh belasan sebulan sebelumnya tuh,[.hh		【語り】
119 I2: [hum		
120 I1:=diajakin ayo kumpul-kumpul, di rt [mana gitu		【内容理解】
121 I2: [hum		【語り】
104 I2:え,昔は地方には,地方じゃない=		【内容理解】
105 =けど,村の行事はあるの?		【情報要求】
106 I1:うん,[あるある,村の,特に独立記念日=		【情報提供】 【語り】
107 I2: [あるの?何するの?		【確認要求】 【情報要求】
108 I1:=かな,[でも=		【語り】
109 I2: [o:h		【内容理解】

110 I1:=時間が経つにつれて:::[:::	【語り】
111 I2: [なくなった	【先取り】
112 I1:減ってきた,[子供が減って=	【語り】
113 I2: [hu:m	【内容理解】
114 I1:=きているから.	【語り】
115 I2:= <u>内向的に</u> なったね	【評価】
116 I1: [heeh,前は小学校,	【承認】 【語り】 ←
117 中学校の頃は,独立記念日	【語り】
118 一ヶ月前[から=	
119 I2: [hum	【内容理解】
120 I1:=集まらされて,村の[どこかに,	【語り】
121 I2: [hum	【内容理解】

会話例(4)では、105~114 行目で I1 が【語り】を行い、それに対し 116 で I2 が【評価】を行った。ここでは、I2 の【評価】の後に、I1 が「heeh」を発話しており、I2 が自分が話したかったことを I1 が代弁してくれたことを【承認】していると考えられる。日本語の会話と同じく、「heeh」の発話後でも、会話の話題が変わらず、さらに I1 がさらなる【語り】を行っているということが証拠であると言えるだろう。

2. 【評価】の後にあいづちが現れないもの

本研究で扱われたデータの中には、【評価】の発話の後にあいづちが現れないデータも見られる。しかし、これはインドネシア語の

データにしか見られず、日本語の会話には【評価】が発話された後に必ずあいづちが現れるということが分かった。つまり、以下のデータでは、【語り】に対する【評価】が発話されても、話し手は【承認】をすることなく会話を進めていると考えられるだろう。このようなデータは以下の連鎖組織を成している。

- 01A: 【語り】
- 02B: 【評価】
- 03A: 【語り】

会話例(5)は、「結婚式の時のご祝儀」という話題で会話が進んでいる。I2 の【語り】に対し、I1 が 280 行目で【感情】⁶のあいづち

⁶ 本研究では【語り】の後に現れるあいづちも見ていくが、本稿では【評価】の後に現れるあいづちに焦点を当てるため、会話例(5)の 280 行目に現れる【感情】についての説明を省く。

をうち、【評価】もしているが、 のまま会話を進めている。
I2 は【承認】をすることなく、そ

<p>(5) データ II (結婚式の時のご祝儀について) 271 I2:kalo tempatku sih sekarang udah nggak terlalu: ini 272 banget sih kayak, kalo di: tempat apah nenekku itu 273 kan masih kampung kampung banget [dan rata rata 274 I1: [hum 275 I2:petani gitu kan? 276 I1: hu:m 277 I2:jadi kalo ada orang, orang yang punya hajat kita tuh 278 gak nyumbang duit tapi kayak, ngebawain kelapaa= 279 I2:=satu: apa[: satu, apa nama karung gitu:;= 280 I1: [hee seru ya? 281 I1:=o:h 282 I2:bawain beras berap kilo: gitu, 283 I2:kalo nggak [bawain ayam berapa ekor gitu. 284 I1: [jadi buat kebutuhannya ini ya?</p>	<p>【語り①】 【内容理解】 【語り①】 【感情】 【評価】 【内容理解】 【語り①】 【確認要求】</p>
<p>285 I2:hum, jadi kalo di kampung kan rata rata pedagang kan ya? 286 I2:[jadi kita ngasih duit, 287 I1:[hum 288 I2:tapi kalo dikampung yang rata rata petani [gitu:; 289 I1: [petani 290 I2: mereka: ngasihnya hasil bumi [gitu 291 I1: [hasilnya ya? eh seru banget</p>	<p>【確認】 【語り②】 【部分的理解】 【語り②】 【確認要求】 【評価】</p>
<p>292 I2:jadi biasanya, yang punya hajat ya:: mereka mungkin 293 modal duit iya, capek iya [gitu= 294 I1: [hum 295 I2:=tapi, gak banget banget karena dibantu sama tetangga 296 tetangga, 297 I1:iya sih</p>	<p>【語り③】 【部分的理解】 【語り③】 【同意】</p>
<p>271 I2:私のところは今あまり 272 田舎じゃないけど,おばあさんのところは 273 けっこう田舎なので,[ほとんど= 274 I1: [hum 275 I2:=みんな農家んだよね 276 I1:hu:m 277 I2:なので結婚パーティーがあったら 278 ご祝儀はお金じゃなく,ココナツを持って行く 279 ひとなに,[ひとぶくろとか;= 280 I1: [hee 面白いね 281 I1:=o:h 282 I2:米何キロとか, 283 または[鶏何匹か 284 I1: [パーティー用の?</p>	<p>【語り①】 【内容理解】 【語り①】 【感情】 【評価】 【内容理解】 【語り①】 【確認要求】</p>
<p>285 I2:hum,だからもしその村に商人が多い場合 286 [お金あげる 287 I1: [hum 288 I2:でも,ほとんどの人が農家が[だったら 289 I1: [農家</p>	<p>【確認】 【語り②】 【部分的理解】 【語り②】</p>
<p>290 I2:田んぼから収穫したもの[をあげる 291 I1: [収穫したもの? eh面白い</p>	<p>【確認要求】 【評価】</p>

292 I2:なので,結婚パーティーを行う家族は	【語り③】
293 疲れすし,お金も出さなきゃいけない[し	【部分的理解】
294 I1: [hum	【語り③】
295 I2:でも,近所たちに手伝ってもらうからまし	
296 になる	【同意】
297 I1:確かにね	

会話例(5)では、280 行目に見られる【評価】が、I2 が 271~283 行目まで行った【語り①⁷】の途中で見られた。291 行目での【評価】は I2 が 285~290 行目まで行った【語り②】が終わった後に見られており、さらに、292 行目からはそれまでとは違う下位話題で I2 の【語り③】が続いている。会話例(5)から、【語り】の途中、または【語り】が終わった後に【評価】の発話が現れても、【承認】が現れずに会話が進んでいくこともあるということが分った。このようにインドネシア語の会話では、【評価】の後に必ずしも【承認】を表すあいづちが現れるとは限らないのである。

⁷ 下位話題が違う為、各界話題の【語り】の発話に番号を①~③付けました。

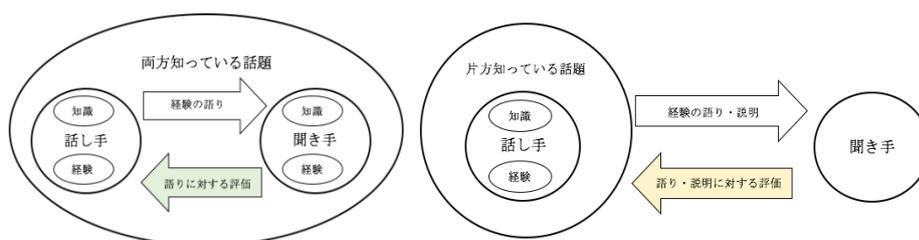
E. おわりに

アプリヤント (2016) では、あいづちが発話された直前の発話を基準にし、あいづちの機能を分析しているが、本研究はあいづちが現れる直前の発話だけでなく、あいづちがどのような会話の流れで現れるのかを見てきた。これにより、同じ【評価】に対して現れる「うん」でも、機能が異なることが分かり、さらに【評価】の後に現れる日本語の「そう」とインドネシア語の「heeh」の機能が同じ傾向にあるということが分った。

しかし、分析を行った際に、本研究のデータ中の【評価】の使用場面が全て同じではないことに気付いた。本研究では「説明の会話」をデータにしているが、この会話データで現れる会話タイプは大きく二つに分けられる。まず、ある話題について A が知っている

ことを知らない B に説明をし、B はその新しい情報・知識に対して、評価をする会話である。もう一つは、ある話題について A と B が知っており、A が自分の経験・知識を語り、そして B が自分の経験を語る、または B は自分の経験・知識をベースにし、評価をする会話である。

図2 会話参加者の知識の差による評価の仕方の違い



このように、ある話題について会話参加者に知識の差が存在すれば、発話される【評価】も違って来るのではないかと考えられる。つまり、【評価】の後に現れるあいづちを考察する前に、その【評価】はどのような「説明の会話」のタイプなのかを先に分類する必要があると考えられる。この点については、今後の課題としたい。

【参考文献】

アプリヤント、オキ・ディタ (2016) 「日本語とインドネシア語の「説明の会話」におけるあいづちの使用に関する

対照研究」大阪大学大学院言語文化研究科 修士論文

アプリヤント、オキ・ディタ (2015) 「日本語とインドネシア語のあいづちの使用に関する対照研究-頻度とタイミングをめぐって-」『日本語・日本文化研究』大阪大学大学院言語文化研究科 日本語・日本文化専攻 pp. 133-143

串田秀也 (1999) 「助け船とお節介：会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社 pp.124-147

串田秀也 (2002) 「会話の中の「うん」と「そう」：話者製の交渉との関わりで」定延利

- 之編『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房 pp.5-46
- 彩藤美代子 (1994) 「効果的な談話と相づちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』第 12 卷 4 号 pp.11-20
- ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 正保勇(1988) 「インドネシア語のあいづち」『日本語学』7 卷 13 号 pp.31-37 明治書院
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- 中里収 (2002) 「あいづちのタイミングと話し手の発話速度の相関について」『言語・音声理解と対話処理研究会』34 号 pp.57-62
- 藤原真理 (1993) 「対話における相づち表現の考察『そうですか』『そうですね』等を中心に」『東北大学文学部本語学科論集』第 3 号 pp.71-82
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』pp.40 くろしお出版
- 水谷信子 (1983) 「あいづち応答」水谷修編『話し言葉の表現』pp.39 筑摩書房
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態-あいづちの分析-」『金田一春彦博士古稀記念論文集』第 2 卷言語学編 pp.261-279 三省堂
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』7 卷 13 号 pp.4-11 明治書院
- 水谷信子 (1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』11 卷 4 号 pp.4-10 明治書院
- 水谷信子 (2001) 「あいづちとポーズの心理学」『言語』第 30 卷 7 号 pp.49
- メイナード、泉子・K (1993) 『会話分析』(日英語対照研究シリーズ) pp.58 くろしお出版
- メイナード・泉子(1987) 「日米会話におけるあいづち表現」『言語』pp.16-11
- Apriyanto, Okie Dita (2011). Penggunaan dan Pengertian Aizuchi pada Pembelajar Bahasa Jepang Mahasiswa Dr. Soetomo. *Skripsi* [アプリヤント、オキ・ディタ(2011)「ドクターストモ大学の日本語学習者におけるあいづちの使用と理解」ドクターストモ大学卒業論文]